シリーズ！ 活躍する2025年度日本ITU協会賞奨励賞受賞者 その2

小石川（こいしかわ） 俊文（としふみ）
NTTドコモソリューションズ株式会社
koishikawa.toshifumi@nttcom.co.jp
https://www.nttcom.co.jp/
（旧社名：NTTコムウェア株式会社）

ETSI-ZSM設立企業の立場で、ネットワークサービス管理の自動化を目指し、標準化をけん引。AI関連の自動化オペレーション、E2Eサービスのライフサイクル管理、Closed-loop等提案で貢献。O-RAN Allianceでは、オープンで高度化された仮想化環境による無線ネットワーク運用に向け、3GPPとの相互接続性の確保に貢献。

ネットワーク運用自動化とOpen RANに向けた取組み

この度は日本ITU協会賞奨励賞という、大変名誉ある賞を頂き、誠にありがとうございます。日本ITU協会の皆様、また、これまでの標準化活動をサポートいただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

私がNTTドコモの代表として標準化業務に従事し始めたのは2018年、各国の通信事業者の商用ネットワークへのAI適用が見られ始めたころで、ネットワーク運用自動化のフレームワークを標準化するETSI ISG ZSMが設立されたのもまさにこの時でした。我々ドコモは当団体の設立メンバとして、初期から議論の積極的なけん引を行ってまいりました。そこではAIOpsに象徴されるユースケース策定（ZSM001）、RAN～コアネットワークにいたるEnd-to-Endのネットワークサービスのライフサイクル管理（ZSM008）、人手を介さずネットワーク品質の最適化を行うClosed LoopのZSMアーキテクチャにおける動作規定（ZSM009-1～3）など、ZSMの根幹を成す規定作業に携わらせていただく機会を得ました。とりわけ、5G時代のネットワークスライシングに対応するため、これまでになかった「E2E Service Management Domain」という新たなドメインの概念を一から構想・仕様化する過程は議論が二転三転し大きな苦労が伴いましたが、最終的には他の標準化団体からも参照を得るレベルの仕様に着地できたことは成果を感じる出来事でした。

2021年からはO-RAN Allianceの場に活動を移し、主にRANにおけるOAM（Operation, Administration and Maintenance）を主な検討課題とするWG10や、O-RAN全体に関わる論理アーキテクチャやユースケースを策定するWG1にて提案を続けています。これまで、オペレータのRAN環境は柔軟性に乏しく、異なるサプライヤの機器間の相互接続が難しいという課題が長らくありましたが、仮想化技術の発展やインタフェースのオープン化に対する機運の高まりにより、そうした状況には大きな変化が生まれています。そうした潮流も生かしつつ、無線装置とOSS間のプロビジョニング・性能管理・故障仕様のオープン化や装置アラームの標準化といった取組みを通じ、マルチサプライヤ環境の実現を目指しています。加えて、他のWG間との横断的な協調も推進し、より実用性の高いOpen RANの実現に取り組んでおります。

私自身は微力ではありますが、引き続き国際標準化における貢献を通じ、日本の通信業界の更なる発展にお役立ちできるよう、努めてまいります。